

ふるさとの 其の17 誇り

日本で初めて 本格的にコンクリートを使用した砂防堰堤 国登録有形文化財「芦安堰堤」



国登録有形文化財「芦安堰堤」

登録有形文化財(建造物)とは、保存及び活用についての措置が特に必要とされる文化財建造物を、文部科学大臣が登録する制度で、指定制度を補完し、より緩やかな保護措置を講じるものです。

県道甲斐芦安線を芦安方面へ向かい、芦安支所を過ぎ林道を進むと、大きな赤い橋「瀬戸大橋」が見えてきます。その橋の真下に大きくそって長い年月を刻んだ砂防堰堤があります。この堰堤こそが日本で初めて、本格的にコンクリートを使用して造られた「芦安堰堤」なのです。

伝承では、御勅使川みだいがわの氾濫はんらんの記録は平安時代のはじめにまでさかのぼります。御勅使川は大量の土砂を運びながら流れ、その土砂が堆積して大扇状地を形成します。「御勅使川扇状地」は日本三大扇状地に数えられています。

明治時代以降、河川における砂防の重要性が唱えられ、特に明治40年の大水害以降、国の直轄により御勅使川など県内の河川において、当時の最先端の工法による砂防堰堤が造られることとなります。

大正4年、日本で初めてコンクリートを試験的に一部に使用した堰堤が日川に造られました。甲州市にある勝沼堰堤(国登録有形文化財)です。

その実績と当時の最先端の技術を駆使



下流から見た芦安堰堤と瀬戸大橋



堰堤の傍らに建てられている記念碑



この記念碑には登録文化財のプレートが埋め込まれています

し、日本で初めて本格的にコンクリートを使用した砂防堰堤の工事が御勅使川上流部で計画されます。それが、芦安堰堤なのです。当時日本の河川事情の中でいかに御勅使川が重要視されていたかがわかります。

芦安堰堤は上部と下部とで構造が違います。重力式とアーチ式の異なる構造を併せ持つ珍しいものです。

大正5年12月に起工、重力式堰堤が大正7年に完成します。その後大正13年にその上部にアーチ式堰堤を増設し、大正15年に完成します。この増設によって当時国内で最も高い砂防堰堤となりました。

芦安堰堤の建設費は当時の金額で約9万6千円かかり、その半分がセメント

代だったといえます。いかにセメントが高価なものだったかがわかります。

御勅使川では芦安堰堤に続き、源堰堤など昭和8年までに11箇所が最先端の技術により造られました。その後堆積した土砂に埋まり、現在まで当時の姿が残されているものはごくわずかです。

芦安堰堤は、現在でも砂防の要として機能しているばかりか、長い年月を経て自然の中にとけこみ、情緒ある景観を形成しています。また、近代の文化的遺産を後世に幅広く継承していくため、平成9年9月3日、国の登録有形文化財となりました。堰堤の傍らには記念碑が設けられ立ち寄ることができます。

ぜひみなさんも芦安堰堤を訪れ、先人の英知にふれてみてはいかがでしょうか。

※2 当時の9万6千円を現在の金額に換算すると約5億円以上になります。

※1 日本三大扇状地は、御勅使川扇状地いさわと胆沢扇状地(岩手)、神戸原扇状地こうどはら(長野)です。